



勝 幡 寺

勝幡寺（しょうばんじ）

山崎四丁目にあり、真言宗 東寺派。本尊は薬師如来立像です。

寺に残る「勝幡寺縁起」永正16年（1519）によれば、養老元年（717）僧行基が開創し、自作の薬師如来像を安置したとあります。

この薬師如来像は、行基が山中に夜毎瑞光を見て、巨樹の空洞より発するのをつきとめ、老樹を伐り、牛頭天王の本地仏である薬師如来像を彫り、洞内に安置したとされることより、地元では「洞薬師」として広く知られています。

また縁起には、永正13年（1516）兵火にかかり全焼し、井上出雲の子孫、井上道西が私財を投じて再建したとあります。この折、本尊の薬師如来像は僧によって抱え出され、焼失を免れて今日に至っています。

鳥羽法皇の信仰も厚く、遺勅に依って御廟を寺内に建立されました。また、後鳥羽上皇も百山の麓、金谷というところで、鍛刀の折、度々寺に行幸し、勅願寺となりました。



薬師如来立像（やくしにょらいりゅうぞう）

鎌倉時代、作者は不詳です。像高 150.1cm のほぼ等身大です。

ヒノキ材。割矧ぎ造りと思われ、彫眼、漆箔仕上げです。頭部は、頭頂からノミを入れ両耳後ろを通る線、両肩後ろ、裾張内側を通る線で割り、内削りの後、矧ぎ合わせていると見られます。左肩先は別材を矧ぎ、右手を矧ぎ、左手を袖口に差し込んでいます。木心を後方に外し、両足半ばより先、および両足先と薬壺は別材。肉髻珠は木製、白毫は水晶です。

螺髪は切子型（彫出）。耳朵は環状。肉髻珠・白毫・三道を表します。裙を着けて衲衣を纏い、右肩に覆肩衣を着けています。右手は屈臂して掌を前にし、五指を伸ばしています。左は垂下して軽く屈し、掌を上にして薬壺を載せ、光背を負い、両足を揃えて蓮台上に立ちます。後頭部を大きく損傷したため、応急的な修理を施しています。肉髻珠・白毫・両足先・薬壺・台座・光背は後補。両手指に後補部があり、表面は一部の漆箔を除き後補。丸顔に撫で肩の体軀、浅く繊細な衣文など平安末期の様式を基本としていますが、穏やかな中に厳しさを感じさせる表情や、左袖外側に見られる直線的な衣文表現などから、鎌倉時代に入る頃の作と推定されます。

平成24年4月1日に町指定文化財の第4号に指定しました。